

在日台灣人作家李琴峰《北極星灑落之夜》研究：從社群視角探討 LGBTQ+群體之「內離」情感

謝惠貞

文藻外語大學日文系副教授

摘要

本研究將以李琴峰《北極星灑落之夜》(筑摩書房, 2020)這部得獎作品為分析對象, 聚焦於以東京新宿二丁目——被譽為「亞洲最大 LGBTQ+城」——的女同志酒吧「北極星」為舞台所建構的文學世界。

首先, 本研究將從社群研究的角度, 運用「關係性面向」、「制度性面向」與「象徵性面向」三個觀點, 分析虛構空間「北極星」所積累的歷史意涵, 以及東亞地區性少數群體之定位。其次, 援引性別／性傾向多元理論 (Gender/Sexual diversity theory), 闡釋性少數內部多元身份分類 (categorization) 所帶來的共鳴, 以及標籤化 (labeling) 所伴隨的暴力性。再者, 本研究將參照強調差異政治的酷兒理論, 闡明其內部矛盾如何催生出「內離」的機制, 並同時探討性少數群體為應對衝突與「內離」情感, 可能建構出何種「複數形」的自我策略。

關鍵詞：社群研究、性別／性傾向多元理論、酷兒理論、內離、複數形

受理日期：2025 年 08 月 22 日

通過日期：2025 年 11 月 07 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202512_(45).0009

**A Research of Taiwanese-Japanese writer, – Li
Kotomi’s *The Night of the Shining North Star*
Exploring the “Inner Estrangement” Emotions of
LGBTQ+ Communities from a Community Perspective**

Hsieh, Hui-Chen

Associate Professor, Department of Japanese Language,
Wenzao Ursuline University of Languages

Abstract

This study will take Li Kotomi's award-winning work, *The Night of the Shining North Star* (Chikumashobo, 2020), as its analytical subject, focusing on the literary world constructed with the lesbian bar "Polaris" in Tokyo's Shinjuku 2-chome—acclaimed as "Asia's largest LGBTQ+ town"—as its stage.

First, this study employs a community studies approach, utilizing three perspectives – the “relational dimension,” “institutional dimension,” and “symbolic dimension” – to analyze the accumulated historical meanings of the fictional space “Polaris” and the positioning of sexual minority communities in East Asia.

Second, drawing upon Gender/Sexual Diversity Theory, the study elucidates the resonances generated by the categorization of diverse identities within sexual minorities, as well as the violence accompanying the process of labeling.

Furthermore, drawing on Queer Theory that foregrounds the politics of difference, this research elucidates the mechanisms through which internal contradictions generate “nairi” (internal estrangement), while also examining the “plural-form” self-strategies that sexual minorities may develop to navigate both conflict and the effects of inner estrangement.

Keywords: Community Studies; Gender/Sexual Diversity Theory; Queer Theory; Inner Estrangement (nairi); Plural-form

在日台湾人作家李琴峰『ポラリスが降り注ぐ夜』研究 —コミュニティの視点から見た LGBTQ+における 「内離」感情—

謝 惠 貞

文藻外語大学日文系准教授

要 旨

小論では、李琴峰『ポラリスが降り注ぐ夜』（筑摩書房、2020）を分析対象とし、「アジア最大のLGBTQ+タウン」とされる東京・新宿二丁目のレズビアンバー「ポラリス」を舞台とする作品世界に注目する。

まずコミュニティ研究の視点から、「関係的位相」「制度的位相」「象徴的位相」という三つの観点に基づき、「ポラリス」という架空空間に蓄積された歴史的意味と、東アジアにおける性的マイノリティの位置づけを分析する。次に、性の多様性（Gender/Sexual diversity）理論を援用し、性的マイノリティ内の多様なアイデンティティの分類（categorization）がもたらす共感と、ラベリング（labeling）に伴う暴力性を解釈する。さらに、差異政治を強調するクィア理論を参照し、内部に生じた矛盾がいかに関「内離」を生み出す契機となったかを明らかにするとともに、それらの葛藤や「内離（内なる疎外）」感情に対処するために、性的マイノリティが構築しうる「複数形」の自己戦略の可能性を論じる。

キーワード：コミュニティ研究、性の多様性理論、
クィア理論、内離、複数形

在日台湾人作家李琴峰『ポラリスが降り注ぐ夜』研究—コミュニティの視点から見た LGBTQ+における「内離」感情—

謝惠貞¹

文藻外国語大学日本語学科 准教授

1. はじめに

台湾籍の日本語作家・李琴峰は、『彼岸花が咲く島』（文藝春秋、2021）で史上初の台湾籍芥川賞受賞者となり、先立つ『ポラリスが降り注ぐ夜』（筑摩書房、2020）では芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。本稿は後者を分析対象とし、「アジア最大の LGBTQ+タウン」とされる東京・新宿二丁目のレズビアンバー「ポラリス」を舞台とする作品世界に注目する。異なる背景を持つ「女性」たちの交錯を通じて、個々のジェンダーやセクシュアリティの葛藤を掘り下げ、人種・国籍・政治・歴史的視座に基づく制約を浮き彫りにする。

まずコミュニティ研究の視点から、「関係的位相」「制度的位相」「象徴的位相」という三つの観点に基づき、「ポラリス」という架空空間に蓄積された歴史的意味と、東アジアにおける性的マイノリティ（性的マイノリティと LGBTQ+を同義語とみなし、引用文との整合性に応じて使い分ける）の位置づけを分析する。次に、性の多様性（Gender/Sexual diversity）理論を援用し、LGBTQ+内の多様なアイデンティティの分類（categorization）がもたらす共感と、ラベリング（labeling）に伴う暴力性を解釈する。

¹ 本稿は、2025年5月25日の日本台湾学会での発表に基づき加筆・修正したものであり、文藻外語大学の研究助成（JPRS112001）の一部支援を受けている。コメンテーターの張文菁氏、査読者各位に謹んで感謝の意を表する。

本稿は二つの核心的な問いを提示する。第一に、LGBTQ+内部での差異や葛藤は、なぜ「内離（内なる疎外）」という苦痛を生むのか。第二に、クィア理論の視座から、登場人物は内離感情にどのように対処し、「複数形」の自己戦略をいかに構築するのか。この問いを通じて、李琴峰文学の現代的意義を明らかにする。

2. 新宿二丁目という「差別」の縮図と LGBTQ+バーのコミュニティ機能

2.1 性産業の歴史と LGBTQ+

李琴峰の『ポラリスが降り注ぐ夜』（筑摩書房、2020。以下、本作と略記し、引用時は頁数のみ記す）は、第71回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した連作短編集である、「日暮れ」「^{ひまわり}太陽花たちの旅」「蝶々や鳥になれるわけでも」「夏の白鳥」「深い縦穴」「五つの災い」「夜明け」の七つの短編は北斗七星に喩えられ、新宿二丁目のレズビアンバー「ポラリス」を基点として、店長の夏子や多様な LGBTQ+当事者の人生が交錯する様を描いている。文化庁は授賞理由において、性的マイノリティを正常・異常のカテゴリーで捉える線引きに苦しむ若者たちの姿と、連帯への希望を描出した点を高く評価している²。

李琴峰が物語の舞台に選んだ新宿二丁目は、江戸時代の宿場町、戦前の赤線地帯を経て、現在では世界有数の「LGBTQ+タウン」へと変貌を遂げた多層的な歴史を持つ。この場所は、地理的・歴史的に性産業が集積してきた「性なる街」として、ジェンダーやセクシュアリティを考察する上で不可欠なフィールドである³。

2 李琴峰（2021.3.5）「『ポラリスが降り注ぐ夜』が芸術選奨新人賞を受賞」note ページ <https://reurl.cc/VWWlgn>（2022.11.30 検索）

3 三橋順子（2018）『新宿「性なる街」の歴史地理』東京：朝日新聞出

このような地域としての歴史的変遷と多層的な流動性は、阪口毅「「地域／コミュニティ」概念を再考する――移動性の観点から」が提唱する三つの位相、すなわち关系的位相、制度的位相、象徴的位相を考察する上で、有益な手がかりとなっている⁴。「关系的位相」とは、地元住民間の相互関係やネットワークの構築を指し、「制度的位相」は、それに基づいて成立する社会秩序や制度的枠組みを意味する。「象徴的位相」は、象徴主義、境界の象徴的構築、対話的な帰属経験を含意する⁵。阪口毅の「关系的位相」の観点から見ると、店や人が移り変わっても「二丁目という街だけが変わらずそこに存在し」（162 頁）、夏子のような存在が新参加者を融け込ませることで、地縁に基づくコミュニティが維持されていることがわかる。この描写から、地縁に基づく「关系的位相」と「象徴的位相」との連動を重視していることがわかる。

しかしながら、「制度的位相」の観点から見ると、新宿二丁目における従来のバー・コミュニティは、近年の LGBTQ+ブームによるプライドパレードの盛り上がりを必ずしも歓迎しているわけではない。とりわけ、プライドパレードをめぐるでは、ゲイとレズビアン、あるいは旧来のメンバーと新世代とのあいだに顕著な温度差が見られ、コミュニティ内において強固な連帯が形成されているとはいいがたい現状が窺える。例えば、かつてのパレード集会において、ゲイの実行委員がレズビアンに浴びせた「レズのくせに何しやがるのか」（145 頁）という罵声は、同性愛者という象徴的な連帯の裏にある、ジェンダー間の根深い階層性と断絶を露呈している。

版、142-182 頁。

4 阪口毅（2021）「「地域／コミュニティ」概念を再考する――移動性の観点から」『現代の社会病理』36 号、京都：日本社会病理学会、43 頁。

5 同上。43 頁表 1。

この出来事は、LGBTQ+コミュニティ内の「象徴的位相」の境界線を示すものである。阪口毅は、「「都市エスニシティ」論以降のコミュニティ研究―「場所」と「出来事」の比較研究序説―」において、三つの位相の連続性を「水脈」と捉え、特定の「場所」で生じる「出来事」が認識の媒介となると論じた⁶。新宿二丁目での「ゲイとレズビアンのパレードをめぐる対立」は、そのような「水脈」が交錯・対立することを明示する出来事であり、同性愛者という象徴的な連帯を共有しながらも、内部に階層的な問題が存在し続けていることを示唆している。

また、堀江有里の『レズビアン・アイデンティティーズ』が示すように、コミュニティは流動的な通過点として機能し、ピアサポート（peer support）の可能性を内包している。本作においてポラリスの店主・夏子の役割を考察すると、LGBTQ+コミュニティがいかに細分化されようとも、「女性」のための支援を一貫して行うことの意義が強調されていることがわかる。夏子は、YouTubeでの発信やアセクシュアルといった新しい潮流に「少し戸惑いはあるながら、これは良い変化だ」（120頁）と受容しており、この態度は現代コミュニティの流動性と、彼女が堅持する寛容的な価値観を象徴している。

2.2 社会における「差別」の縮図

李琴峰は、エッセイ集『透明な膜を隔てながら』において、社会や法律の枠組みからこぼれ落ちる人々を「可視化すること、それこそ文学の、芸術の役割」だと述べている⁷。こうした文学観は、本作においても随所に見られ、特に次のような街頭カウンセラーを介した描写に顕著である。

6 阪口毅(2017)「「都市エスニシティ」論以降のコミュニティ研究―「場所」と「出来事」の比較研究序説―」『中央大学社会科学研究所年報』21号、東京：中央大学社会科学研究所、135頁。

7 李琴峰(2022)『透明な膜を隔てながら』東京：早川書房、245頁。

新宿は社会の縮図だと僕は思うんですよ。ゴールデン街のような一風変わった飲み屋街があって、欲望の街・歌舞伎町があって、そして性的マイノリティの街・新宿二丁目がある。(193-194 頁)

阪口毅の前掲論文によれば、現代の都市社会においては、コミュニティの領域性は必ずしも明確な実体として存在するわけではない。ただし、特定の「場所」を起点とすることで、二つの契機が生じるという。彼は、「場所」は開放性と閉鎖性の両義的な契機を持つ。開放性の契機は移動とネットワークの「繫留点 (anchor point)」であり、閉鎖性の契機は社会空間を一時的に切断する「待避所 (asylum)」である」⁸と説いている。この視点から読み解くならば、本作において「社会の縮図」として描かれる新宿は、まず「繫留点」としての機能を果たす。そこには、多様な人々が流入し、流出していくと同時に、社会における性差別や偏見もまた集約される。また、テキストの解釈のレベルでは、異なる性的指向や異なる民族に対する差別、偏見が重層的に結びつき、強固な解釈のネットワークを形成していると考えられる。

さらに、文学史の観点から見ると、紀大偉は『同志文学史：台湾的發明』において、「同性愛主体効果」を喚起する作品群を広く包含する必要性を唱えるとともに、台湾同志文学史の起源として、共産党と国民党の曖昧な関係を鶏姦によって風刺した姜貴の『重陽』（作品、1961 年）や、中学生男子の淡い同性恋愛を描いた郭良蕙の『青草青青』（漢麟、1963 年）など

8 阪口毅(2017)「「都市エスニシティ」論以降のコミュニティ研究—「場所」と「出来事」の比較研究序説—」『中央大学社会科学研究所年報』21号、東京：中央大学社会科学研究所、131 頁。

を挙げている⁹。これらの作品はいずれも、「同性愛嫌悪 (homophobia)」¹⁰という抑圧的状況下において創作されたものであると指摘している。

2.3 同性愛バーのコミュニティ機能

上述のように、社会的差別にさらされ、都市の周縁を彷徨うレズビアンたちにとって、新宿二丁目の同性愛バーは、一時的に社会空間を遮断する「待避所」としての機能を果たしている。作中では、かつて「内藤新宿時代には飯盛女の投げ込み寺」(256頁)だった成覚寺が、現代ではレズビアン系の店が集まる「Lの小道」へと変貌し、「駆け込み寺＝待避所」としての機能も担う空間へと転換されることで、この場所の重層的な歴史が描かれている。この変遷は、歴史的に抑圧されてきた女性マイノリティのコミュニティ機能が、時代を超えて形を変えながらも受け継がれていることを示唆している。

さらに、「待避所」としてのこの空間には、主流社会の価値観や規範による抑圧から一定の距離を置きつつ、そこに独自の存在意義を確立しようとする意識が色濃く投影されている。例えば、夏子は常に次のように考えている。例えば、夏子は同性愛者の歴史においてさえ「女は男の影にいる」(163頁)と痛感しており、男性中心的な「彼ら」の歴史とは異なる、「『わたしたち』の歴史」(163頁)こそが、この地に刻まれるべきだと考えている。

ここで、阪口毅の前掲論文「『地域／コミュニティ』概念を再考する――移動性の観点から――」を参照したい。阪口は、コミュニティ概念が「親密な紐帯、集団の想像、象徴的な境界、帰属の経験」¹¹といった現象を理解する上で有効であると述

9 紀大偉『同志文學史：台灣的發明』聯經、2017年、130-131頁。

10 同上書、130-160頁。

11 阪口毅(2021)「『地域／コミュニティ』概念を再考する――移動性の観点から――」『現代の社会病理』36号、京都：日本社会病理学会、37頁。

べている。この観点から見ると、本作は新宿二丁目の同性愛バーを「コミュニティ」の舞台とし、東アジアの近現代史を背景に、政治運動や文化的多様性の中で、LGBTQ+がいかにコミュニティとの連帯感を育み、自己と他者の集団を想像するのか、また、どのようにして LGBTQ+としての境界線を認識し、帰属意識を形成するのか、さらにその過程でいかなる「内離」¹²感情を経験するのかを、繊細に描き出しているといえる。

本作は、郭良蕙『兩種以外の』(1978年)¹³に見られるレズビアン群像の描写を受け継ぎ、白先勇『孽子』をはじめとする1980年代以降の台湾文学が描いてきた「罷家・做人・告白(家を出る・自立する・告白する)」¹⁴という叙述の伝統に連なりながらも、その舞台を「代替家族」の空間として日本・新宿二丁目へ移した点において¹⁵、台湾同志文学史の新たな展開を示すものでもある。

3. 性的マイノリティの分類と越境描写

3.1 マイノリティ(少数派)の中のマイノリティ(少数派)

前節の議論を踏まえ、本節では、本作が単にレズビアンという性的マイノリティを描くにとどまらず、その内部に存在するさらなる細分化された存在、すなわちバイセクシュアル、アセクシュアル、ノンセクシュアル、トランスジェンダーといった「マイノリティの中のマイノリティ」に焦点を当てて

12 ここでいう「内離」は、李琴峰のデビュー作『独り舞』において言及された概念であり、「『内離』——内なる疎外。一方が他方を含んでいるように見えるが、いくらその軌跡を辿って回っても、両者は永遠に交わらない」(李琴峰[2018]『独り舞』東京：講談社、162頁)とされている。4.で詳しく論じたい。

13 紀大偉により「台湾文学史上で最も早く同志を『物語の主軸』に据えた長編小説」と評されている。紀大偉、前掲書、147頁。

14 紀大偉、前掲書 208-281頁。原文「經過罷家的考驗(承受罷家過程的種種暴力)、才能夠「好好做人」、好好成為同性戀主體」。

15 紀大偉、前掲書、299頁。

いる点に注目する。本作の中国語版に寄せられた、著名なバイセクシュアル作家の陳雪は本作の推薦文において、同性婚が合法化された台湾でさえ、カテゴリーへの帰属が必ずしも安心をもたらすわけではなく、ラベルや分類の必要性が依然として問われていると指摘し、本作の現代的意義を強調している¹⁶。このように本作は、LGBTQ+の存在を描くだけでなく、その中での分類や位置づけが、当事者の内面にいかに作用するかを問いかける作品である。例えば、「恋愛こそがあらゆる関係の墓場」（94 頁）だと思ふアセクシュアルの蘇雪や、自分の分類を、「恋愛恐怖症」や「性嫌悪症」について調べ、「ノンセクシュアル」（99 頁）に辿り着いた利穂は、恋愛や性愛に対する異なる立場を取っている¹⁷。

LGBTQ+の分類には識別の限界がある。ジュリー・ソンドラ・デッカー（Julie Sondra Decker）『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて——誰にも性的魅力を感じない私たちについて』でも、「アセクシュアルの人たちは、排除されたり、削除されたり、無視されたりすることによって、常にその性的指向への挑戦を受けているのです」¹⁸と指摘されている。ノンセクシュアルやアセクシュアルといった、性的マイノリティの中のマイノリティに位置づけられる人々は、

16 陳雪（2022）「推薦序 那些美麗的星子啊」李琴峰著、李琴峰訳『北極星灑落之夜』、台北：尖端、5 頁。

17 李琴峰著（2022）『北極星灑落之夜』（李琴峰訳、台北：尖端出版、108 頁）の注釈 7 によれば、「無性戀（asexual）與非性戀（nonsexual）是日文世界特有的用法、簡單而言、前者指對他人不抱戀愛情感、後者雖有戀愛情感、對他人卻不具性慾。這與英文世界涵義不同」。筆者による日本語訳は以下である。「アセクシャル（asexual）とノンセクシュアル（nonsexual）は、日本語圏において特有の用法を示す語彙である。簡潔に述べれば、前者（アセクシャル）は他者に対し恋愛感情を抱かない状態を指し、後者（ノンセクシュアル）は恋愛感情を抱くものの、他者に対する性欲を欠如する状態を意味する。この両者の意味合いは、英語圏における関連用語の涵義とは異なる点に留意する必要がある」。

18 ジュリー・ソンドラ・デッカー（Julie Sondra Decker）著（2019）『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて——誰にも性的魅力を感じない私たちについて』上田勢子訳、東京：明石書店、81 頁。

LGBTQ+の「聖地」とされる新宿二丁目に対して「象徴的位相」として強い憧れや帰属欲求を抱く。しかし、実際の「関係的位相」としての新宿二丁目では、そうした人々が排除されたり、既存の LGBTQ+分類において不可視化・無視されたりする傾向がある。

このような「マイノリティの中のマイノリティ」という位置づけは、台湾のクィア研究における名著『罔兩問景¹⁹』で提唱された概念と響き合う。「罔兩^{もうりょう}」という言葉は、劉人鵬らが莊子『齊物論』の「罔兩問景」に着想を得て定義したものであり、「影の外にある微かな影」として、クィアの存在を捉え直す枠組みを提示している。すなわち、形（可視的な存在）と影（その暗影）という二元論的対話の外部に位置づけられる、曖昧で不確かな存在としての「罔兩」である¹⁹。洪凌はさらにこの概念を発展させ、「制度的権力（形）」および「主流への同化を目指すジェンダー政治／同性愛の正統（影）」からなる「同性愛の正統化（homo-normativity）」の構造に対し、そこに収まらない「少数たち（minor multitude）」²⁰としての「クィア罔兩性」の存在を論じた。

この点について、星野智幸は、本作が「マイノリティ同士の中でも生じうる力関係」²¹を緻密に描いていると指摘している。この視点からは、「同類」としての分類が持つ意味や限界について、改めて問い直すことができる。つまり、LGBTQ+という枠組みの内部においても、多数派と「少数たち

19 劉人鵬、白瑞梅、丁乃非（2007）「序「罔兩問景」方法論」、劉人鵬、白瑞梅、丁乃非編著、『罔兩問景：酷兒閱讀攻略』、中壢市：中央大學性別研究室、IV 頁。

20 原文「少數眾」。洪凌（2012）「過往遺跡、負面情感、魍罔兩魎：從海澀愛的「倒退政治」揣摩三位異體的酷兒渣滓」、劉人鵬、宋玉雯、鄭聖勳、蔡孟哲編『酷兒・情感・政治：海澀愛文選』、台北：蜆樓股份有限公司、209 頁。

21 星野智幸「線引きという障害を越えていく、メロドラマの傑作：李琴峰著『ポラリスが降り注ぐ夜』」『Nippon.com』2020.04.17。
<https://reurl.cc/Omm46D>。

(minor multitude)」との間に権力関係や階層構造が存在し、相互理解が制限される状況が生じるのである。その具体例として、「五つの災い」に登場するトランス女性レズビアンの冴（さえ）と、同じくトランス女性レズビアンの若虹が挙げられる。彼女たちは、複雑な性自認と性的指向を持つがゆえに社会からの受容を得られず、結果として性そのものに対して深い嫌悪感を抱くようになる。さえと若虹は互いに強く求め合いながらも、出生時の肉体に起因する「性に対する本能的な嫌悪感」（227 頁）によって、性愛そのものに深い葛藤を抱えている。

好井裕明は『セクシュアリティの多様性と排除』において、「トランスジェンダーではあるが性同一性障害者ではない」²²といった存在が持つ複雑さを指摘している。2.で論じたように、LGBTQ+は「性」を基準に分類されるがゆえに、しばしば無意識的な偏見の対象となる。そしてその偏見は、個人の内面において自尊心の喪失や劣等感の問題へと転化していく。小論では、こうした「クィア岡両性」が現実社会においてどのような交渉を行い、アドボカシー（権利擁護活動）をいかに展開しうるのか、その道筋を考察していく。

3.2 分類 (categorize) の共感とラベリング (Labeling) の暴力

前述の通り、李琴峰は LGBTQ+にもさらなる少数派が存在し、影の外に微かな影としての「岡両」があるように、それが決して一枚岩ではないことを示そうとしている。こうした「岡両」たちの中には、自らの存在が分類され、明確に位置づけられることを切望する者もいる。性的指向に迷いを抱える少数派の中には、自身の分類を見出すことによって、初め

22 好井裕明（2010）『セクシュアリティの多様性と排除』、東京：明石書店、16-17 頁。

て自己の存在が肯定されたと実感する者もいる。例えば、「蝶々や鳥になれるわけでも」に登場する利穂は、分類の「名前というのは、自分は一人じゃないってことの証拠」(97 頁)だと語り、情報の密林を経て「ノンセクシュアル」(99 頁)という言葉に辿り着いたことで、他者との連帯を得ている。

ここから、一部の「両性」が外部(形や影)の分類(カテゴリー)を通じて自己を位置づけ、ひいては帰属感を得ていることがわかる。分類によって他者との連帯感が生まれ、それが勇気につながっているのである。「五つの災い」の冴もまた、その典型例である。2024 年 11 月 20 日、李琴峰は「「トランスジェンダー追悼の日」アウティングされ声明」²³において、自身がトランスジェンダーであることを公表した。これにより、「あとがき」で冴が作家となったことも、李による一種のトランスジェンダー表明と捉えることができる。また、作者自身がレズビアンコミュニティ内で経験したトランスジェンダー女性としての生きづらさや、深層心理における生存戦略についても、より深く分析することが可能となる。

トランスジェンダーという言葉がさえの在り方を名付け、GID がその在り方に正当性を与え、LGBT がそれを位置付けた。そしてどれもそれまでなかった安心感をさえにもたらした。(215 頁)

しかしながら、「同性愛」、「両性愛」、「トランスジェンダー」、「LGBTQ+」といった呼称は、一部の少数派に帰属意識をもたらす一方で、分類されることを望まない、あるい

23 『彼岸花が咲く島』が芥川賞を受賞した当時、李琴峰は、ネットユーザーによってトランスジェンダーであることを暴露され、苦痛を経験していた。李琴峰(2024.11.22)「「トランスジェンダー追悼の日」アウティングされ声明」、(<https://reurl.cc/EQQRy0>、2024.11.22 検索)。二階堂友紀(2024.12.1)「アウティング被害、追い詰められトランスジェンダー公表 芥川賞作家・李さん」、『朝日新聞』、東京：朝日新聞社。

は分類によって引き裂かれることに暴力性を感じる人々も存在する。しかし、「同性愛」や「LGBTQ+」といった呼称は、一部に帰属意識をもたらす一方で、分類そのものを暴力と感じる者も生み出す。例えば、「日暮れ」の香凜は自らに「名前をつける必要」（173 頁）を感じず、「太陽花たちの旅」の怡君も無理な線引きを「必ず誰かを引き裂く」（40 頁）暴力だと捉えている。彼女らは、既存のカテゴリーによる「分断」への葛藤を如実に体現しているといえる。

日本の同性愛文学史を参照すると、本作の位置づけがより明確になる。伊藤氏貴は『同性愛文学の系譜』において、日本近代文学における同性愛が、明治以降の西洋概念の流入により²⁴、単なる「嗜好」や「通過儀礼」から、「病理化」という過程を経て、更に「アイデンティティ」や生来的な「種」へと変容したと指摘している²⁵。かつてはラベリングを伴わなかった同性愛が、近代以降、明確な「種」として定義されるようになったという歴史的経緯は、本作の登場人物たちが直面する「分類（Categorization）」への葛藤を理解する上で重要な視座を提供する²⁸。

この論点は、本作における LGBTQ+の中の少数派が、分類によって得る「帰属感」と、それによって生じる挫折感を、どのように経験しているのかを理解するうえで、重要な手がかりとなる。例えば、「自分をバイセクシュアルだとは思っていません。かといって完全なレズビアンでもない気がします」（198 頁）と語る香凜は、自らをラベリングされたくない理由を「どの言葉を使っても、自分自身を部分的に削り取ってしまうような気がするんです」（198 頁）と説明している。

24 伊藤氏貴(2020)『同性愛文学の系譜:日本近現代文学における LGBT 以前/以後』、東京：勉誠出版、17 頁。

25 同上書、106 頁。

28 同上書、24-106 頁。

このように、LGBTQ+内部の少数派＝「罔両」であっても、ラベリングの暴力を鋭く認識しており、分類されること自体がしばしば暴力として作用するという事実が、明確に描かれている。江南亜美子「書評『ポラリスが降り注ぐ夜』李琴峰著」では、これを「マイノリティとのレッテル貼りへの抵抗」²⁹と捉えている。彼女はそれを「世界が押し付ける枠から逃れ、……アイデンティティと自由を死守すること」³⁰と表現している。ここで注目すべきは、登場人物たちが守ろうとするアイデンティティは、社会や LGBTQ+の主流の枠組みによって定義されたものではなく、極めて個人的な自己定義であるということである。こうした姿勢は、近代日本文学における同性愛観の変遷と響き合うものであり、登場人物たちは、「アイデンティティ」から「人種」へと移行する段階において、それらの枠組みに葛藤を抱えつつ、その苦悩を乗り越えるために、「人種」というカテゴリーそのものの打破を試みている。それは「太陽花たちの旅」や「五つの災い」に登場する、トランスジェンダーの冴（暁虹）の性徴と性的指向の多重的な屈折にも表れている。

例えば、トランスジェンダーの冴（暁虹）は、「女が好きだから……異性愛の男だと思ってた」（76 頁）が、後に自らの性自認が女性であると覚知するに至る。この過程は、アイデンティティの認識がいかに既存の枠組みに翻弄されるかを示している。この告白に対して、冴（暁虹）に秘かに恋心を抱いていたレズビアン of 怡君は、LGBTQ+でありながらも、冴（暁虹）のような LGBTQ+内部のさらなるマイノリティに対して、若い頃には「それはマイノリティとすら呼べないほど限られた個体に過ぎず、「例外」という言葉で簡単に片付け

29 江南亜美子(2020.4.19)「書評『ポラリスが降り注ぐ夜』李琴峰著」『CHUNICHI WEB』、<https://reurl.cc/WOO1OD> (2022.11.30 検索)。

30 同上サイト。

てしまえるくらいのものであった」(41 頁)と思っていた。そのため、冴(暁虹)の特殊な状況を知ると、反射的に「元男の暁虹への気持ちは自身の(筆者注: レズビアンの)アイデンティティを脅かすものであった」(76 頁)と感じて戸惑い、躊躇する。この動揺は冴(暁虹)を傷つけ、相互理解をさらに困難なものとし、結果として互いを傷つけることになる。このように、LGBTQ+内部の少数派であっても、アイデンティティは極めて個別的なものであり、完全な相互理解が本質的に困難であることが示されている。

この点に関して、李琴峰は「人種、性別、性的指向の境界線についても、同じことが言えると思う。そうした属性による規定から解放され、真に一個の人間として互いに向き合えるようになるその時こそ、「越境」は本当の意味で達成され得る」³³と述べている。李は、ラベリングによる暴力が、分類によって得られる共感をも上回るほどの脅威になりうることを示唆している。本作は、多文化共生社会において、LGBTQ+を一括りにする危うさ、またその内部に潜む個々の差異にも目を向けるべきだという批判的意識を孕んだ作品なのである。

3.3 東アジア状況の越境と交錯

越境の観点から見ると、「関係的位相」は東アジアにおける LGBTQ+の越境描写にも意識されている。本作の「あとがき」にある通り、「ポラリス」以外の多くの店には現実のモデルが存在する³⁴。この虚実ないまぜの手法は、歴史やジェン

31 李琴峰(2022)『北極星灑落之夜』(李琴峰訳、台北: 尖端、95 頁)に、作者は「女同志認同」と補足している。

33 李琴峰『透明な膜を隔てながら』、早川書房、2022.8、200 頁。

34 李琴峰「活著，在撲朔迷離的令和——《北極星灑落之夜》繁體中文版後記」、李琴峰(2022)『北極星灑落之夜』、李琴峰訳、台北: 尖端、317 頁。張文菁氏のご教示によれば、リリス(56 頁)は Bar Gold Finger を、KIDSWOMYN(145 頁)は Kinswomyn を、あじゃれ(146 頁)はあじゃらを、バー・テン(146 頁)は Bar Five をモデルにしていると考えられる。

ダーの傷跡を巧みに重ね合わせ、物語にリアリティと奥行きを与えている。日比嘉高が指摘するように、作者は歴史・政治が個人の多様性を形成していることを暗示している。日比によれば、作者は、歴史・政治が個人史や性的指向、性自認といった個人の多様性を形成していることを暗示しようと試みている³⁵。そのため本作では、LGBTQ+の個人史を同時代の社会状況と意図的に重ね合わせる手法がとられている。これは、1987年の戒厳令解除およびエイズ問題を転機点とする、20世紀末の台湾同志文学における特徴を色濃く受け継いでいる³⁶。1990年代の台湾同志文学において、メディアを介した「抵抗型パブリック」と主流的「パブリック」との対立が生じたように³⁷、李琴峰もまた、歴史的・政治的文脈を個人のセクシュアリティと重ね合わせる手法を継承している。

さらに、^{ひまわり}太陽花学生運動において性のマイノリティが不可視化されていた点や、各分野で経済的に自立する女性の描写は、1970年代台湾同志文学において女性間の恋愛を主題とした作品群が提示した「女学生モデル」と「経済動物モデル」³⁸という二つのモードを明確に継承している。例えば、曉虹については「大学二年生の時から社会運動に関与していて、近

35 日比嘉高(2020)「李琴峰『ポラリスが降り注ぐ夜』作家の進化を示す欲張りで充実した連作小説」『すばる』42巻5号、東京：集英社、318-319頁。

36 紀大偉、前掲書、343頁。

37 紀大偉、前掲書、348-354頁。原文は「抵抗性公共」と「公共」。

38 紀大偉は、前者(原文は「女学生模式」)を朱天心の散文集(1977)『擊壤歌』(台北：長河)および短編小説(1977)「浪淘沙」(台北：言心)を代表とし、楊千鶴(1942)「花咲く季節」(『台灣文學』2〔3〕)、李昂(1982)「回顧」(『愛情試験』、台北：洪範)における女子学生の同性愛と異性愛の絡み合いに遡ることができると指摘する。後者(原文は「經濟動物模式」)は、老包〔詹錫奎〕(1977)の長編小説『再見、黃磚路』(台北：東村)における米軍駐留時代の台湾で歌う「女エルヴィス・プレスリー」の物語を例とし、凌煙(1990)『失聲畫眉』(台北：自立晚報社)の劇団のレズビアンたちの物語にも広げることができる。そして、両方のパターンを兼ね備えたものとして、李屏瑤(2016)『向光植物』(台北：時報、日本語訳は李琴峰訳〔2022〕『向日性植物』東京：光文社)を挙げている。紀大偉、前掲書、147-172頁。

年台湾で後を絶たない様々な分野で勃発している抗議活動やデモ行進の常連になっている。といっても実際に前線に出て戦うことは稀で、技術を活かしてウェブサイトを作ったり情報を発信したりするのが主な役割だった」（57 頁）と描写されている。また、天安門事件に関する言論統制（188 頁）や、自民党議員の「生産性がない」発言に対する抗議デモへの参加（316 頁）といった描写も、マイノリティが直面する政治的抑圧と抵抗の実践を具体的に示している。

以上を踏まえると、歴史的・政治的現実に基づく「パブリック」が、階級差別だけでなく伝統的ジェンダー規範の抑圧も生み出し、東アジアに共通する LGBTQ+たちの境遇をも規定している³⁹ことが浮かび上がる。

さらに、李琴峰の本作が日本文壇において明らかな存在感を示し始めたことは、漫画家の吾峠呼世晴や歌手の米津玄師と共に日本芸術選奨を受賞したことや、LGBTQ+をめぐる言説のキーオピニオンリーダー⁴⁰として日本メディアで注目されている⁴¹ことから明らかである。その背景には、台湾の同志運動が文学を媒介として発展してきた歴史と、アジアで初めて同性婚を合法化した先駆性を受け継ぎつつ、李が連帯の輪を広げ、東アジア的状况における交差的な対話の構築を試みている点がある。

39 瀬地山角は、東アジアの状況と横断的に比較し、「ジェンダー規範というのは、資本主義や社会主義といった社会体制によって簡単に覆せるようなものではなく、いわばそれぞれの社会の土台をなす規範」と述べている。瀬地山角編著『ジェンダーとセクシュアリティで見る東アジア』勁草書房、2017.11、297 頁。

40 李琴峰は、山内マリコさん、柚木麻子さんとの文責で、石田衣良さん、桐野夏生さんら計 51 人の小説家が賛同者として名を連ねた共同声明を発表し、トランスジェンダー差別反対運動をリードした。藤沢美由紀、「LGBTQ+差別に反対 小説家 51 人が声明 攻撃的言動の増加で」、(<https://reurl.cc/Y33XED>、2024 年 11 月 20 日)。

41 青木理『時代の反逆者たち』（筑摩書房、2024 年）は、中島岳志、松尾貴史、国谷裕子、指宿昭一、奈倉有里、斎藤幸平、栗原俊雄、金英丸とともに、李琴峰を取りあげた。

4. (不) 可視な「罔両」の「内離」感情と「複数形」の交渉戦略

4.1 (不) 可視な「罔両」の「内離」感情

台湾と日本の同志文学史の変遷を比較した 3. の考察を踏まえると、李琴峰の本作は白先勇『孽子』以来の「罷家・做人・告白」など、台湾同志文学の叙述的伝統を受け継ぎながら、日本の新宿二丁目における LGBTQ+ コミュニティとも接続している点が際立つ。そこには、台北の新公園が果たしてきた代替家族機能も色濃く反映されている。

前述した LGBTQ+ 内部の少数派の分析と、李琴峰『透明な膜を隔てながら』における作者の自己開示に基づけば、本作には国籍、世代、言語、ジェンダー、歴史が異なる LGBTQ+ が登場し、社会の偏見や差別、さらには政治の影響が描かれている⁴²。一方で、さらに進んでコミュニティ内部の「結束や連帯の政治は、排除と分離と表裏一体」⁴³という矛盾した特徴にも直面しており、それを批判的に描写している。以下はその具体例である。

太陽花学生運動の場面において、運動の主導者が報道の焦点を操作するために LGBTQ+ の存在を不可視化したことに対し、曉虹は「見られたくないものは見えなくすればいい」(64 頁) という自粛の論理を皮肉り、怡君は「我慢を強いられるのは常に少数者の方」(64 頁) と失望を露わにする。このように本作は、民主主義を守るための場であっても、伝統的なジェンダー秩序維持のためにマイノリティが排除される構造を批判的に描いている。

上記は、太陽花学生運動^{ひまわり}の政治的議題において、運動の主導者が報道の焦点を操作する意図のもとに LGBTQ+ の存在を

42 李琴峰 (2022) 『透明な膜を隔てながら』東京：早川書房、129 頁。

43 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編著 (2019) 『クィア・スタディーズをひらく 1』東京：晃洋書房、124 頁。

前面に出さず、結果として彼らを不可視化（invisalization）し、伝統的な社会のジェンダー秩序の維持に加担してしまった場面である。台湾同志文学史においては、このような画一的なジェンダー規範に沿うことを求める社会的圧力に対して、一貫して異議を唱えてきた歴史がある。代表的な作品として、邱妙津『鱷魚手記』（時報文化、1994年）、李屏瑤『向光植物』（時報出版、2022年）などが挙げられる。

斎藤光が指摘するように、セクシュアリティを自己同一性の問題として理解しようとする立場は本質主義へ傾斜しがちである⁴⁴。また、佐倉智美は E.ゴフマンの社会的相互行為論を援用し、場の秩序が参加者の相互観測と解釈によって創出されると述べている⁴⁵。トランスジェンダーが直面する困難は、こうした相互行為秩序における暗黙の規範との齟齬、すなわち J.バトラーのいう異性愛マトリクスにおける規範的強制と自己感覚との衝突に起因すると考えられる⁴⁶。

また、カミングアウトは単なる可視化ではなく、複雑な力学を伴う行為である。E.K.セジウィックの「クローゼット論」によれば、それは知と権力を規定する装置であり⁴⁷、冴の経験のように生存空間を広げる一方で、社会的な暗黙の了解と衝突する場面が多い。この力学は、次の描写からも読み取れる。

かつては生存空間を切り拓くための武器であったカミングアウトが、女性として生活する現在では、逆に「生存空間を狭めることになりかねない」（239 頁）という冴の葛藤は、セジウィックのクローゼット論における知と権力の力学を体現している。この状況は個人的葛藤にとどまらず、バトラーの

44 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編（1996）岩波講座『セクシュアリティの社会学』岩波書店。

45 佐倉智美（2021）『性別解体新書：身体、ジェンダー、好きの多様性』、東京：現代書館、240 頁。

46 佐倉智美、前掲書、242 頁。

47 イヴ・コゾフスキー・セジウィック（2018）『クローゼットの認識論—セクシュアリティの 20 世紀—』外岡尚美訳、東京：青土社、第一章。

異性愛マトリクスと連動する「不可視化の暴力」が、公私の境界や沈黙・発話を操作し、非規範的身体を排除する。したがって、登場人物の葛藤は社会的知や権力構造によっても再生産されるのである。

上記の引用を分析すると、相互行為秩序における期待のずれが相互理解を妨げており、LGBTQ+は依然として本質主義的なラベリングから逃れられていないことが読み取れる。しかしながら、このような本質主義的な認識は、「コミュニティ」という概念にも及んでおり、特に親密さや一体感を求める「関係的位相」では、その傾向がより顕著に表れる。その結果、「制度的位相」における共同体が本来抱える「包摂しつつ排除する」⁴⁸という矛盾に目を向けることが難しくなる。また、アイデンティティの確立には他者との差異を画定する必要があるが、「繫留点」にも「待避所」にもなりうる流動的、複数的なアイデンティティを持つコミュニティに触れることで、当事者が失望を感じることもある。本作はその失望という感情自体にも焦点を当てている。

こうした「両面」たちが失望を感じるのは、本質主義を内面化してしまっているためでもある。以下は、LGBTQ+のアイデンティティに対する「完璧」な幻想をめぐる描写である。

香凜は、「完全」とは人類が作り出した架空の概念に過ぎず、「完全なレズビアン」など実在しない（169頁）と考え、コミュニティに蔓延する「完全さ」への幻想を否定的に捉えている。登場人物は、社会的ジェンダー規範を内面化することで、自らの「不完全さ」に傷つき、「内離」の感情を抱く。本作はそうした喪失感を通じて、LGBTQ+のアイデンティティをめぐる幻想が、本質主義の枠組み（frame）のなかでいかに崩壊していくかを浮き彫りにしている。さえは、純女では

48 菊地夏野ほか、前掲書、122頁。

ないことが知られたら拒絶されるという恐怖から、居場所であるはずの二丁目を支配する「恋愛至上主義の空気」(245 頁)に、ある種の疎外感を覚えている。

この場面では、傷ついたと感じる登場人物の心情を通じて、性的指向による分類と性愛への価値観の違いが描かれ、性の多様性という問題が浮かび上がる。李琴峰は LGBTQ+ も決して一枚岩ではないことを強調している。彼女が述べる「属性による規定から解放され」⁴⁹た時の「越境」は、アイデンティティの流動性を意識した表現と解釈できる。また李は、トランスジェンダーの生理的越境や同性愛者の情愛への依存度の差異など、ジェンダーや性のあり方を一様ではないスペクトルとして多層的に描き出している。

ここで、李は、少数派か多数派かを問わず、「完璧」や「完全」といった価値観が人を孤立させ、「内離」を引き起こすと指摘しようとしている。「内離」という語は、著者の前作『独り舞』において「同じものが別のものを包含しているにもかかわらず、両者の軌跡は決して交わらない」(162 頁)状態として示された疎外感に由来しており、本作ではこの概念がコミュニティ内部の葛藤として継承されている。「完璧」や「完全」を求める思想が、自己にも他者にも抑圧的に作用する構造を浮き彫りにしている。両性愛者をはじめとする LGBTQ+ のコミュニティにおける「不完全さ」や、法制度上の「自由 (Liberty)」は、既存の文化構造を根本的に変えるには至らず、そのため「不完全さ」は常態化している。当事者は、自らに完全性を課し、その枠から逸脱することを許されないという感覚に陥り、「内離」という葛藤を抱えることになる。「不完全」なコミュニティ内では、他者との理解は到達困難な彼岸でしかありえない。例えば、以下の楊欣がそうである。例え

49 李琴峰『透明な膜を隔てながら』早川書房、2022.8、200 頁。

ば香凛は、楊欣が自らを「完全なレズビアン」(170 頁)と信じ込む姿勢こそが弱さの根源であり、その「完全さ」ゆえに選択の余地を自ら狭めていると洞察している。

本作が探求する「完全」と「不完全」の揺らぎは、「性に関する流動的なアイデンティティ(を生きる人)」⁵⁰というクィアの定義に照らし合わせることで、より明確になる。「内離」は、J.クリステヴァの「アブジェクション」概念と響き合う⁵¹。アブジェクションが主体形成の過程で象徴秩序から排除されるものを指すのに対し、「内離」はこの作用が共同体内部で生じ、当事者によって内面化される特異な情感を捉える。したがって、属性を柔軟に捉えるクィア的思考が、「内離」や相互理解の隔たりを乗り越える手がかりとなる。

4.2 「複数形」の交渉戦略

筆者の考えでは、「罔両」たちが抱く「完璧なアイデンティティ」への幻想は、コミュニティの「制度的位相」よりも、むしろ「関係的位相」を重視する姿勢に根ざしている。この点に関して、アイリス・M・ヤングは、コミュニティという理想が差異よりも統一を、他者理解の限界認識よりも同情を特権化しがちであると警鐘を鳴らしている⁵²。こうした「社会的な親密さと心地よさへの欲望」を、安易な統一ではなく、差異を包摂した連帯へと結びつけることによって、「複数形」としての個体という姿勢が形成されるのである。

つまり、連帯への欲望とは、「複数形で存在すること」を体現する個体の姿勢とも理解できる。堀江有里は「集団カミング・アウト」という戦略を提示し、レズビアンとしてのア

50 森山至貴(2017)『LGBTを読みとく：クィア・スタディーズ入門』東京：筑摩書房、130 頁。

51 ジュリア・クリステヴァ著、枝川昌雄訳(1984)『恐怖の権力：アブジェクション』試論』東京：法政大学出版局、3 頁。

52 フェミニスト政治哲学者のアイリス・M・ヤングによる言葉。菊地夏野ほか、前掲書、123 頁。

イデンティティの表明が決して固定的・不変的なものではなく、「個々人のもつそのほかの諸要素——複数形としてのアイデンティティーズ——とともに交差すること。さらに、同性愛嫌悪／恐怖（ホモフォビア）と交渉をつづける場でもあること」⁵³と主張している。これは、前述した集団志向とは異なる概念である。筆者は、堀江の戦略と張小虹のいう「分而不離」（分類されても互いに離れない）⁵⁴という相通じる理想は、本質的に理念を共有していると考える。この前提に立てば、LGBTQ+の共同体は、流動的な「複数形」として構築される場合にのみ成立しうる。この流動性が失われると、共同体内部で差異が過剰に意識され、「内離」とも呼べる疎外感が生じ得る。冴の場合も、自己の位置づけや他者との関係に揺れながら、この内離感情を体験しており、その結果として、共同体としての連帯は堀江の示す「複数形」本来の強みを十分に発揮できなくなる可能性が示唆される。

さらに、作者は2019年の台湾同性婚法成立直前にデビューしており⁵⁵、個々の経験を文学史的・歴史的な文脈の中で意識的に描写している。本作をこの視点で読み解くと、登場人物たちは多様な戦略を用いて「集団性」と交渉しながら、自らの生存空間の拡張を試みていると解釈できる。例えば、日本において不可視化されがちなLGBTQ+の「個性性」を可視化し、新宿二丁目という場において、それぞれ個性を持つ単数のLGBTQ+たちが結集して形成されるコミュニティ＝「複数形」は、堀江のいう「集団的なカミングアウト」の一形態とみなせるだろう。この実践は、伝統的なジェンダー秩序に基づく

53 堀江有里、前掲書、155頁。

54 張小虹（2025.5.17）『『共組』的美学政治：多元成家不成家』中華民国比較文学学会第四十七回全国比較文学會議——構置」講演、於台湾・国立成功大学光復校区。

55 「独舞」（『群像』2017年6月号）により、第60回「群像新人小説賞」優秀作を受賞した。単行本は『独り舞』と改題し、2018年講談社より刊行された。

社会に対して不協和音を鳴らしつつ、主流社会における「集団性」との対話を図る試みでもある。

例えば、第一の交渉戦略として挙げられるのが、怡君のように「運動がきっかけで……法律研究科に入り直し、司法試験で弁護士資格を取得した」(80 頁)という階級の上昇である。また、冴のように「怒りの炎を社会運動の場で解き放ち……自己を保つ」(225-226 頁)ことによる自己の可視化や、自己検閲からの脱却も、この戦略に含まれる。いずれも主流社会＝パブリックの「集団性」と対話しようとする姿勢の表れである。

このような社会的行動は、単なる個人的な生存戦略にとどまらず、「複数形」のアイデンティティに根ざした歴史的連帯感に基づく集団行動としても捉えられる。暁もその一例であり、「使命感に駆られた。……パレードやデモにも参加し、……当事者の声を届けた」(257-258 頁)という実践にその姿勢が現れている。

上記の戦略をまとめると、本作に登場する LGBTQ+たちは、完全な相互理解を前提とせず、齟齬を抱えながらも、独自の生存戦略を模索している。とりわけ、M to F の性転換手術前の冴は「真の自分になるために、カミングアウトを必要とした」(285 頁)のに対し、手術後は「自分であり続けるために、嘘をつかねばならない」(285 頁)と考える。この対照的な内面の変化は、本作が提示する生存戦略の複雑さを端的に示している。

冴の生き方には、「嘘をつくこと」によって個性を守るという生存戦略が凝縮されている。それにもかかわらず、「関係的位相」において冴が属するコミュニティは、「分而不離」の実践により、「それぞれに違いはあっても連帯感が生まれる」⁵⁶

56 森山至貴『LGBT を読みとく：クィア・スタディーズ入門』(筑摩書

場として機能している。それは、「私達はずっとここにいるの。……常に複数形で」（161 頁）という台詞が示す通り、単数としての個性を保持しつつ連帯する「想像上の共同体」の形成である。

この「複数形」の理解は、単に「異なる LGBTQ+の集合体」という意味にとどまらない。むしろ、堀江有里がいう「複数形の自己定義は、固定した単数のものではなく、あくまでもノイズとして発しつつけるなかで、暫定的に表れる<アイデンティティーズ>」⁵⁷の実践とも解釈できる。このようなレズビアン単数集合体の存続は、阪口毅のいう「繫留点」、あるいは堀江のいう「流動的な通過点」として機能し、ジェンダー二元論や異性愛中心主義社会に対して継続的に不協和音を奏でるのである。例えば、冴は、単数としての個性を守るために罪悪感を覚えつつも「嘘をつく」ことで流動性を確保し、複数形のアイデンティティーズ戦略を体現したといえる。

第二の交渉戦略は、自身の思考の硬直を自覚し、「否定的な価値付けの積極的な引き受けによる価値転倒」を試みることである⁵⁸。例えば、両性愛者の香凜は、「完全さという幻想に縛られず……今現在を噛み締める」（205 頁）関係性を選択することで、自己の「不完全」性を肯定的に受容しようと試みている。これは、否定的な価値付けを逆手にとった価値転倒の戦略といえる。

第三の交渉戦略は、「トランスジェンダーといっても、女の子でしょ？（235 頁）」という夏子の寛容な態度によって、

房、2017、186 頁）クィア研究の三大視点として「差異に基づく連帯の志向」「否定的な価値付けの積極的な引き受けによる価値転倒」「アイデンティティの両義性や流動性に対する着目」が総括される。

57 堀江有里、前掲書、156 頁。

58 森山至貴『LGBTを読みとく：クィア・スタディーズ入門』（筑摩書房、2017、186 頁）が提唱する、前述したクィア研究の三大視点の総括の一つである。

トランスジェンダーの冴が「アイデンティティの両義性や流動性」を再考する契機を得た点である。

以上のように、本作の登場人物らが、社会的・法的制度の枠組みの外側で経験してきた苦難や葛藤は、虚構化されることによって、単なる個別の経験にとどまらず、LGBTQ+の「複数形」による集合的な記憶として昇華されていく。そしてその記憶は、テキストとして記録されることにより、歴史と共鳴しながら、集団性との交渉を今なお続けているのである。

5. 終わりに

本稿は、コミュニティ研究の視点に立ち、「関係的位相」「制度的位相」「象徴的位相」の観点から本作を分析した。特にLGBTQ+コミュニティ内の少数派「罔両」に注目し、劉人鵬らの「クィア罔両性」や堀江有里の「複数形としての流動的なアイデンティティーズ」、ゴフマンの社会学的理論及びクリステヴァ、バトラー、セジウィックらのクィア理論を援用した。性的多様性に基づく分類が「連帯意識」形成を目指す一方、ラベリングが「内離」感情を誘発する現象を指摘した。これは登場人物の「関係的位相」への渴望と、「制度的位相」が内包する「包摂しつつ排除する」矛盾への失望であると論じた。この失望の背景に「完璧」なアイデンティティへの幻想、すなわち本質主義の内面化を考察し、作中ではアイデンティティの流動性を受容することで、それを乗り越えようとする複数形の交渉戦略が描かれていると分析した。さらに、白先勇『孽子』に見られる「罷家・做人・告白」の叙述的伝統を継承し、「代替家族」の物語を新宿へ移すことで、日台両国の同志（同性愛）文学史を繋ぐ特異かつ意義深い作品だと結論付けた。

参考文献

日本語（五十音順）

- 青木理（2024）『時代の反逆者たち』（東京：筑摩書房）
- イヴ・コゾフスキー・セジウィック（2018）『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀—』外岡尚美訳、東京：青土社
- 伊藤氏貴（2020）『同性愛文学の系譜：日本近現代文学におけるLGBT以前/以後』、東京：勉誠出版
- 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編（1996）『セクシュアリティの社会学』東京：岩波書店
- 江南亜美子（2020.4.19）「書評『ポラリスが降り注ぐ夜』李琴峰著」『CHUNICHI WEB』、<https://reurl.cc/WOO1OD>（2022.11.30 検索）。
- 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編著（2019）『クィア・スタディーズをひらく1』東京：晃洋書房
- 阪口毅（2017）「「都市エスニシティ」論以降のコミュニティ研究—「場所」と「出来事」の比較研究序説—」『中央大学社会科学研究所年報』21号、東京：中央大学社会科学研究所、135頁。
- 阪口毅（2021）「「地域／コミュニティ」概念を再考する——移動性の観点から」『現代の社会病理』36、京都：日本社会病理学会、43頁。
- 佐倉智美（2021）『性別解体新書：身体、ジェンダー、好きの多様性』、東京：現代書館
- ジュディス・バトラー著、竹村和子訳（1999）『ジェンダー・トラブル』東京：青土社
- ジュリア・クリステヴァ著、枝川昌雄訳（1984）『恐怖の権力（アブジェクション）試論』東京：法政大学出版局
- ジュリー・ソンドラ・デッカー著（2019）『見えない性的指向（アセクシュアル）のすべて——誰にも性的魅力を感じない私たちについて』上田勢子訳、東京：明石書店
- 瀬地山角編著（2017）『ジェンダーとセクシュアリティで見る東アジア』東京：勁草書房
- 二階堂友紀（2024.12.1）「アウティング被害、追い詰められトランスジェンダー公表 芥川賞作家・李さん」、『朝日新聞』、東京：朝日新聞社。

- 日比嘉高（2020）「李琴峰『ポラリスが降り注ぐ夜』 作家の進化を示す欲張りで充実した連作小説」『すばる』42(5)、東京：集英社、318-319 頁。
- 藤沢美由紀（2024.11.20）「LGBTQ+差別に反対 小説家 51 人が声明 攻撃的言動の増加で」、<https://reurl.cc/Y33XED>（2024.11.20 検索）。
- 星野智幸（2020.4.17）「線引きという障害を越えていく、メロドラマの傑作：李琴峰著『ポラリスが降り注ぐ夜』」『Nippon.com』。<https://reurl.cc/Omm46D>（2022.10.17 検索）。
- 三橋順子（2018）『新宿「性なる街」の歴史地理』東京：朝日新聞出版、142-182 頁。
- 森山至貴（2017）『LGBT を読みとく：クィア・スタディーズ入門』東京：筑摩書房
- 好井裕明（2010）『セクシュアリティの多様性と排除』、東京：明石書店、16-17 頁。
- 李琴峰（2018）『独り舞』東京：講談社
- 李琴峰（2022）『透明な膜を隔てながら』東京：早川書房
- 李琴峰（2024.11.22）「「トランスジェンダー追悼の日」アウティングされ声明」（<https://reurl.cc/EQQRy0>、2024.11.22 検索）。

中国語（筆画数順）

- 李琴峰（2022）『北極星灑落之夜』李琴峰訳、台北：尖端
- 洪凌（2012）「過往遺跡、負面情感、魍罔兩魍：從海澀愛的「倒退政治」揣摩三位異體的酷兒渣滓」、劉人鵬、宋玉雯、鄭聖勳、蔡孟哲編『酷兒・情感・政治：海澀愛文選』、台北：蜃樓股份有限公司
- 紀大偉（2017）『同志文學史：台灣的發明』台北：聯經
- 陳雪（2022）「推薦序 那些美麗的星子啊」李琴峰著、李琴峰訳『北極星灑落之夜』、台北：尖端、5 頁。
- 張小虹（2025.5.17）「『共組』的美學政治：多元成家不成家」中華民國比較文學學會第四十七回全國比較文學會議——構置」講演、於台灣・國立成功大學光復校区。
- 劉人鵬、白瑞梅、丁乃非編著、『罔兩問景：酷兒閱讀攻略』、中壢市：中央大學性別研究室